

ぱれっとスタッフによる 福祉用語解説

●アセスメントとは

広辞苑によると「評価。査定。見積。」と出てきます。これだけでは分からない方も多いのではないのでしょうか。

アセスメントはその人の現状を把握することや支援の計画書を作成するのにとても重要なものです。

日本ではアセスメントという言葉を使用しガイドラインなどで明記されていますが、具体的にどのようなアセスメントを使用するか悩むことも多いのです。

●アセスメントの種類

アセスメントの種類は大きく分けて2つあります。

① フォーマルアセスメント

標準化尺度を用いられたアセスメントのことで、何度実施しても同じ結果が出る信憑性や測定したいものを明確に図る妥当性が優れているアセスメントです。

※デメリットとして

- 1, 評価を受ける人の状態によって結果が左右されやすい、
 - 2, アセスメントの中の問題の順番や手順などの変更ができない枠組みの中で実施されるもので、臨機応変な対応ができない、などが挙げられます。
- あくまでマニュアルに沿った手順に従い、信憑性と妥当性の確保に努めます。

【フォーマルアセスメントの例】

- ・発達検査、知能検査(WISC_V、新版 K 発達検査 2020、田中ビネー知能検 V 等)
- ・言語検査(LC スケール、LCSA、質問応答関係検査 等)
- ・適応検査(Vineland II、適応行動尺度 等)

ぱれっとの職員による「福祉用語解説」。今回は福祉の業界ではよく耳にする「アセスメント」について解説します。

いずれも標準化検査であり、結果が数値化されていますが、使用される検査については事業所や評価者によって異なり、全国で統一されていません。

② インフォーマルアセスメント

既存の枠組みがなく評価者の知りたいことを直接評価することができます。

日常場面での行動観察など自然な環境での評価が可能です。

※デメリットとして

自由度が高いアセスメントとなっているため評価者によってアセスメントの内容が異なる などが挙げられます。評価者の経験や知見など様々な能力が必要になります。

【インフォーマルアセスメントの例】

- 1, 家族面談や関連機械による情報
- 2, 日々の支援の内容
- 3, 行動分析

いずれの方法も主観にならないように注意が必要です。

例えば「作業中の離席が多かった」

⇒作業中ずっと？ 回数はいくつ？

このように具体的に情報が欲しい時は抽象的な表現だけでは不十分です。

5W1H を意識し継続的に情報収集が必要です。

●まとめ

このようにアセスメントは様々な支援の手立ての方法を得るための一つです。2種類のアセスメントを上手に組み合わせることで、アセスメントを踏まえて作成する計画書の内容や支援方法が充実したものになります。

(ぱれっとホーム 香取麻子)